

京都帝國大學卒業證書授與式及
史學科卒業生

京都帝國大學に於ては去七月十三日卒業證書授與式を舉行し各科卒業生四百十三名に卒業證書を授與したりしが、當日は御名代宮眞愛親王殿下御臨場あらせられ、又侍從石山基陽氏より優等卒業生八名に恩賜品を授與せられたり。當文科大學史學科にては會員今村孝三氏(國史學專攻)、「宮尊徳の學說及び事業」と題する論文を提出し、優秀の成績を以て卒業せられたり。因に會員史學科學生古田良一氏は同日を以て次學年特待學生に選定せられたり。

台覽品及其說明

去七月十三日京都帝國大學卒業證書授與式に際し、御名代宮殿下の台覽に供したるもの、目錄及說明書左の如し。

一 觀音寺文書

近江國栗太郡觀音寺藏

觀音寺は秦河勝の開基と傳ふる古刹なるが後天台宗となり織田信長の墓後當時の住持賢珍筆豐臣秀吉に力説して山門再興の補助を求め秀吉其意氣に感じて錢壹萬貫を寄附せり(豐臣秀吉山門再興奉加帳)。これより賢珍は秀吉に用ゐられて近江に於ける秀吉直轄地の代官となれり。當時秀吉が賢珍に宛てたる金子請取狀には「け

なる康熙帝は其間の隱情を洞破し康熙五十一・二年に兩詔を下し人口の實數を知らんとする新方鍼を指示したれども人口の増加著しからず(同五十二年二千四百六十二萬餘、雍正二年二千四百八十五萬餘)。乾隆五年、更に保甲の節に據り戶口の實數を知らんとし編審法は全く空文となり、所謂丁地に隨て起るの法にして此稅制の變革は全く編審の制を無意義ならしめ乾隆三十七年六月の上諭により同制は全然廢され、單に保甲の報告によりて民數を知る事となり乾隆六年の一億四千三百三十一萬餘は漸次増加し同廿九年には二億五百五十九萬餘となりしも帝は更に四十年、二上諭を下して地方官に正確なる報告を督勵され五十七年には三億七百四十六萬餘に達し頗る得意なりしが如く、帝の目的は戶口の繁庶を示し百代に誇耀せんとするにありて自己の希望數に達したる以上敢て督勵せられざりしなり。其後咸豐元年には四億三千二百十六萬餘に上り更に多少の減少を來し光緒十三年には優に四億萬を越ゆべし。支那に於ける人口論には其過剩を患ふるマルサス主義の如きもの殆んどなし、や、類似の議論は李拔の所論乾隆帝五十八年の上諭なりとて本稿を結ぶ。(中村)

んちん)なる假字の宛名を自署し又五奉行の連署せる文祿三年近江代官所の收支決算書にも其一々秀吉の檢閲を經べきこと見ゆたり(秀吉奉行連署算用帳)居常聚放磊落を以て知られし秀吉は又思慮周密殊に理財に長じたりしを思ふべし。此決算書には文祿役に出征せる近江の船員及び當時修築中なりし伏見城の構造、經費の一端をも載す、又秀吉自筆茶湯道具目錄は秀吉が茶會を催すの日自ら四疊半の茶室に陳列すべき諸道具を選定列記せるものなるが皆其蒐集に係る天下の名器なり、其品目左の如し。

- 一 やうのふ 澹淵夜雨の繪にして茶器名物集に玉爛の邊繪あり、
- 一 まきかまばき、同書に秀吉所藏の名物として載せ天正十五年十月秀吉北野大茶湯會に出陳せるもの、

一 むりてんもく、北野大茶湯に出陳し又聚樂第の茶會にも用ゐたるもの、

(乙) 御前

一 おこしせのうば、天正八年秀吉播磨。但馬を征服したる功を賞して信長より賜りしもの、茶器名物集に秀吉所藏、水四升八合入かこあり、北大野茶湯會にも出陳せり、

一 うめのふさ、茶器名物集名物の水指の部に秀吉所藏南蠻陶器にて天下一品と見ゆるもの、亦北野大茶湯會に出陳せり、

一 なつさうろり、長坐露吏即ち花瓶にして北野大茶湯會に出陳す、茶器名物集に紹鷗より秀吉に傳はれる天

下無雙の名物と見ゆるものか、
一 う鉢のふたをき、亦北野大茶湯會に出陳せり、
秀吉は腰客を招きて自ら茶を點し又挿花をも善くせり。

一 近衛家記録

公爵 近衛文應藏

秀吉は文祿二年十月徳川家康前田利家毛利輝元等を隨へ禁中に於て自ら能樂を演じて天覽に供せしが前左大臣近衛信尹は秀吉の弓八幡を見て神變奇特と評せり(近衛信尹筆文祿二年禁中三日猿樂御觀記)。

一 下間文書

京都市下間九鬼三郎藏

文祿四年五月秀吉伏見城にあり關白豊臣秀次と共に自ら能樂を演じて下間少進法印の批評を求め邯鄲の巧妙を褒せられて喜悅の餘り自ら着用せる唐織の小袖を取りて法印に給へり(下間少進法印筆能之留帳)秀吉は又法印が秘藏の假面を贈れるを賞し更に能具の新調を求めたり(秀吉内書)少進法印は一代の名匠にして童舞抄叢傳抄及舞臺之圖の著あり有名なる出目源介(滿吉)は法印專屬の假面工なり(出目源介起請文)當時侯伯法印の門に入りて教を請へるもの多し家康の第四子松平忠吉亦童舞抄の傳授を受けて血判の誓紙を興へたり(松平忠吉血判起請文)法印の賞讃を博せる秀吉が

歡喜の情想ひ見るべし。

秀吉は茶事、能樂の外、和歌に連俳に、往く處として可ならざるはなかりき、これ其絶倫の天才に依れりといはれ、又何事にも徹底せざれば已まざる性格の然らしめし所ならん。秀吉の和歌を以て他人の代作とする俗説の如きは固より取るに足らず。

文科大學教授文學博士 三浦周行說明

一 希臘羅馬素燒土偶

此の土偶の多數は埃及に於ける希臘人の植民地ナウクラチスより發見せしものにて、其他は希臘雅典附近、同チリント、クリート島ゴルチナ、シチリヤ島セリヌンテ及チルチエンチより出でたるものなり、製作の目的は神祠への奉獻と墳墓への副葬にあり、ナウクラチスのものは殊に前者に屬するもの多し、希臘に於いて彫刻の技術は原始的古拙の時代より漸次進歩發達して紀元前第四世紀の頃に至りて完美の域に達し、遂にまた羅馬時代に及びて墮落衰頽に至りし徑路はなほ此の小土偶に於いても認むるに足るものあるは特に興味を感ずる所以なり、即ち(一)ミケーネ時代(チリント發見物)の太古より(二)古拙時代(セリヌンテ、チルチエンチ、雅典發見物)を経て、終に(三)完美時代(チンチエンチ、ナウクラチス發見物)に達し、更に(四)衰頽時代(ゴルチナ、ナウクラチス發見物)に至る。殊に最後の時代に於いては寫生的形相

の多きを認む可し。

文科大學助教 濱田耕作說明

學位 授 與

會員文學士河合弘民氏及同新見吉治氏は京都帝國大學に學位論文を提出せられ文科大學教授會に於て審査の結果、何れも去八月五日を以て文學博士の學位を授與せられたり。兩氏の論文題目左の如し。

李朝税制に關する研究

河合弘民氏提出

日本に於ける武家政治の歴史(附逸文) 新見吉治氏提出

興聖寺の古寫本一切藏經調査

京都堀川頭町なる圓通山興聖寺は、慶長年間の開基にして、禪宗臨濟派の名山なるが、此の寺に古くより寫本一切經を藏せることは、既に徹底上人の古經題跋にも見ゆ、北野興聖寺の所藏として「有大藏經、海住山舊藏也、有承萬長承等歎識」と記せり。然れどもその後人の注意を惹くこと多からざりしが如く、これに關する記事の公やけにせられたるものあるを聞かず、昨年大藏會にその中の數冊が陳列せられ、今年佛教研究會の有志が、寺を訪ひて半日の検討を重ねしは、これが再生の曙光なるべし。同寺縁起(享保十一年作)の記する所によれば「此寺有一藏經、當時藏經記曰、往日後鳥羽帝詔一時高僧明慧解脫等暨土御百官、以令繕寫、帝亦

間染宸翰、置于笠置山、慶長年中移納此齋舍矣、寛永女帝及東福門院寄附經面及經藏」を見ゆ、經藏は今も残れども、經卷はその當時の輪紙の舊匣に收められたるまゝ、に移されて法堂内に堆積せらる。多くは長寛・永萬・仁安年間の寫にして、これを補ふにその前後の寫本もしくは版本を以てせるものなるが、此等版寫本の時代は甚だ多様にして、前者には僅少の宋版本の外、宋版の模刻と思はる、日本版(或は野山版歟)を初め、應永乙未(二)の版本、また頗るこれと類して稍趣を異にせるもの等あり、後者には延暦四年書寫の奥書ある大唐西域記を最古(?)として、降りては嘉吉二年に書寫して藏内の闕を補ふ旨を記せるものもあり、また中には書寫の年代は不明なれど、武后の新字を以て記せる天授の年號をそのまゝに寫し、武周の舊帙の面影を能く傳へたりと思はるゝものもあり、或は涅槃經の大部分をはじめ、其の他の卷にも和訓を施せるものあるなど、種々の方面より見て興趣津津たるものあり、而してこれ等の多くが縁起に見ゆるが如く笠置山の舊藏なりとさするも、然も中には古經題跋にも見ゆるが如く、山城海住山の藏經なるを記せるもあり、或は防州萬松山、或は丹州桑田細西樂寺一切經中のものなるを明らかにせるもありて、後に諸方より蒐集して完成せしめたるものなるを知るべし。もこよりいまだ全般に亘りて調査を経たるに非れば、なほ如何なる種類のものが存在しました

研究資料として如何なる價値を有するものなるかは知る可らず、今は主として王朝末期の書寫になれる彪然たる一切經が、なほ世に喧傳せられずして洛中の一山に埋藏せらるゝものあるを報するに止めんとす。(羽田)

讀 史 會

例會 六月廿五日午後六時より學生集會場に於て本學年最終の例會を開催す。三浦教授、濱田助教授、西田講師、清原、魚澄、座田、中村、今村、神浦、松野、古田、辰馬、下川、梅原の諸氏出席。先づ本年卒業さるべき今村君の講演あり。

佐藤信淵の教育學說に就て。

今村孝三君

幕末の農政學者佐藤信淵は農民生活の向上進歩を計りたれば、其教育學說亦見るべきあり。彼の家學は四世の祖信國に始り、父信時より傳へて彼に及ぶ、明和六年六月十五日出羽國に生れ、嘉永三年正月を以て死す。此間、父の事によりて秋田藩を去り山陽、山陰、西海等に遊び、足迹全國に遍し。江戸にて宇多川海庵に學び、地理歴算に詳しく、華山、長英の獄に下さるゝや、夢の夢物語を書きて幕府の嫌忌に觸れし彼は幸にして門人の密告によりて姿を匿し事なきを得たり。平田篤胤も深交あり、且儒教にも造詣深かりき。故に彼の學說は、神道儒蘭の學とに負ふこゝも多く、佛教との關係は少し。彼の主張は、被教育者は之れを分ちて、治

者、一般人民、農氏の三級とし、各々相當の教育を施すべく。又教育は衣食住足りて後行はるべきものにして、教育のものは經濟にありとす。彼は家庭教育よりも學校教育を重んじ、四五歳より廿歳頃までを教育さるべき期間とす。教育の中央機關は之を教化塾と言ひ大師ありて教育の根本を掌握り、其下に大學、小學、教養所等あり、別に慈育院を設けて細民教育をなすべし。農氏に對するには特別機關を設け、教師は宜しく彼等と起居を共にし日夜相接して教誨べしとなし、尊徳の風化的行政とや、似たり。而して農氏は娛樂機關に缺けるを以て鎮守の祭禮の如きを盛にする必要ありとせり云々。

Charles Waldstein, Herchlmann, Iasi Present
and Future,
濱田助教授

鯉橋大學美術史教授なるワルドスタン氏が伊太利ヘラクラニュームの發掘に就ての本著書中に偶々日本に關する記事あるを見、此れにつきて日本の考古學界の現況を語り、將來の日本考古學についで希望を述べ、尙餘談としてローマのバチカンに陳列されたる慶長十一年九月四日附伊達政宗書狀、一五八五年七月二日附大村藩使節の感謝狀等の寫眞を示しつゝ、見聞談あり。

次に清原學士は安居院法印の「神道集」の製作年代の考證及其冊數異同に就き、中村學士は琵琶湖上の水路を述べ、坂本朝妻間の

航路に就て注意し、下川君は盟神探湯に就て、牧君は日本史の研究方法に就て、辰馬君は大學の講義に就ての希望を、古田君は日本史と西洋史との比較研究に就て、神浦君は在學中の心得、梅原君は日本出土の鏡に就て、今村君は安積良齋の遺蹟遺物に就て、松野君はエジプトの宗教に就て、座田君は地圖の使用に就て、魚澄學士は赤穂義士と天野屋義兵衛に關する異聞を、西田學士は近江國愛知郡に散在する佛像を、三浦教授は史學研究殊に史的事實の比較研究に於て注意すべき事項に就て各々短話を試み、午後十時半散會す。

名古屋市史の完成

昨年七月以來逐次刊行せられつゝ、ありし名古屋市史は今回其の地理編の印行を終り茲に編纂計劃以來幾多の星霜を重ねたる名古屋市史の完成を見るに至れり。

名古屋市は東海道之中央、交通の要衝にあり、尾濃參の平野を後に控へ、古來史蹟に乏しからず。同市が市史の編纂を計劃し、海道股賑の都市の由つて來るところを明かにし、先人偉業の蹟を彰さんとし、曩に文學士堀田璋左右氏を聘して編輯の事を委囑し、其下に亦專問史家の事に従ふあり、爾來多額の資と長き年月とを以てし、浩瀚なる名古屋市史の稿成り刻檄に附せらる。全篇九冊、五千八百餘頁に上り、政治・學藝・風俗・社寺・產業・地理の六篇に

分ち、尙地囀集一套を附せり。近年府縣郡市の史誌世に出づるもの多く、東京市志の如き大阪市史の如き尙大なる編帙を見るは我、國史界の洵に慶賀に堪へざるどころなるが名古屋市史又之れに參し、中京都市の面目を古今に通じて窺ふことを得しむる、吾人の至幸と言ふべし。

阿波國民政資料の蒐集及出版

近來諸地方に於て、堙滅せむとする史實と史料を調査蒐集するもの多きは斯學の爲め欣喜に堪へざる處なり。徳島縣は南海の一角に位せる邊陲なれども、古代史實に富み舊時の埋封亦二十五萬餘石を算ふ、史料の豊富なる言を俟たず。曩に大正二年阿波國民政資料展覽會を開設し蒐集の資料を編綴刊行し以て温故知新の料に資せしが、更に昨年御即位記念として十一月十日より本年四月末日迄第二回の展覽會を開き、又別に御大典奉祝協贊會を設けて委員を設置し資料の編纂に従事せり。其の出品點數實に四千八百餘點、特に蜂須賀侯傳家よりは珍饈の有益なる資料の出陳多かりき。陳列の部類は政務、狩獵、任用、服務、社寺、宗教、以下民事、人事、農業、林業乃至交通等大凡三十二部に分てり。今同印刷成るを告げ不日世に公にせむとする由のものは其の主要なる史料を集めしものにして、古くは南北朝、室町時代より近く廢藩置縣に至る迄前後六百有餘年に亙る文書、舊記、器具、建築材料等の出品を網羅

したるを以て民政上の資料たるのみならず歴史上、考古學上、亦好資料たるもの少なからず、總紙數一千頁を越ゆる大冊なり、普通世上に見る唯古記録等の一般的史料の蒐集と異なり特に政治經濟方面に重きを置きたる點に於て興味あるべきものなり(那波)

會 報

會費領收報告(振替貯金拂込のものに限る)

(大正五年八月三十一日迄に受領の分)

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 一金壹圓貳拾錢(大正五年分) | 平泉 澄 三幣 竹藏 八丹 幸八 山田 眞芳 |
| 岡部保治郎 | 北澤捨次郎 三井甲之助 新見 吉治 |
| 田邊 勝哉 | 牧野信之助 木野戸勝隆 川上 多助 |
| 兒玉 九十 | 高橋裕之助 中島利一郎 芝 葛盛 |
| 芦田 伊人 | 伊木 壽一 栗田 元次 黒板 勝美 |
| 櫻井 秀 | 諏訪 強哉 須長 直彦 田中 義成 |
| 玉利 陟 | 辻 善之助 中村 勝麿 三上 參次 |
| 八代 國治 | 渡邊 世祐 鷲尾 順敬 山村彌久馬 |
| 清水 福市 | 上田 確郎 下戸前繁松 |
| 一金九拾錢(大正五年一期半分) | |
| 石田 恭造 山内 祀夫 | |

一金壹圓五拾錢(大正五年分)

猪熊 信男 大阪朝日新聞京都通信部

野山 忠幹

辻村周次郎

一金貳圓(大正三ノ第三期、大正四年分)

加藤 繁

一金壹圓(大正六年上半期分、四十錢預り)

丸山太一郎

一金壹圓貳拾錢(大正五年下半年分、同六年上半期分)

龜井 高孝

寄贈交換書目

支那古田制の研究(加藤繁著)

佐久間象山

八杵神社と長國造

眞宗全史(村上專精著)

史料通覽

國史叢書

日本偉人言行資料

考古學雜誌 七、八、九

史學雜誌 六、七、八

伊豫史談 五

飛驒史壇 二ノ五

京都法學會

象山先生遺跡表彰會

島田泉山

西午出版社

日本史籍保存會

國史研究會

同會

考古學會

史學會

伊豫史談會

飛驒史談會

前號正誤

(誤) (正)

蘭書譯局の創設ノ中

五〇頁上段末行

天明は

安永の

五七頁下段

Doef

Doef

五八頁下段

Chomel

N. Chomel

ビエトロ・オルシイ氏の『カヅール傳』を讀むノ中

一四一頁上段本文一行

ビエトロ

ビエトロ

同 七行

獨逸でも

獨逸語でも

同 九行

明治

明治

同下段

五行(左)の語

同 終ヨリ五行

一びた

一たび

一四二頁上段 八行

の編する

編する

同 終ヨリ二行

首卷

卷首

一四三頁下段 二行

the

the

一四六頁上段 八行

カヅール

カヅール

史學研究會ノ中

一五三頁下段終ヨリ四行

ワイルリアムテム・ブル

一五四頁上段 十行

雜著中は 雜著中には

同 十行

痛首

痛風